

あの人の
「魅力」に
迫る

葛西紀明

さん

スキージャンプ選手

Interview
Kasai Noriaki



ソチ五輪で冬季五輪史上最多となる7回連続出場を果たした葛西紀明選手。ノルディックスキー・ジャンプ男子フリーヒルで、念願の銀メダルに満面の笑みを見せ、団体で取った銅メダルには感激の涙を見せた姿は、まだ記憶に新しい。20年以上にわたり第一線で活躍を続ける葛西選手に、モチベーションの保ち方や今後の目標などについてお話いただいた。

家族に支えられたジャンプ人生 夢を手放さない者だけが 夢を実現できる



2014年2月、7回目のオリンピックとなるソチ五輪で、個人で初の銀メダルを獲得 写真：フォート・キシモト

小3で体感した ジャンプの醍醐味

今でこそ「あらゆるスポーツを競い合う世界大会があったら、自分が優勝する！」なんて豪語していますが、実は小学校に上がるまでは病弱だったんです。でも、小学校に上がってマラソンを始め、夏は近所の山や川で遊び、冬はスキーをして遊ん

柔軟な思考が新たな 希望をもたらす

19歳で初めてオリンピックに出場し、それ以来7回連続でオリンピックに出させていたのですが、それを可能にしているのは、「努力」と「悔しさ」ですね。

これまでの選手人生を振り返ると、体調不良に泣いたこともあるし、着地に失敗し、大きな怪我をしたこともありました。恐怖心から思うように飛べなくなった時期もあります。なかでも、最大の挫折感に襲われたのは、2002年のソルトレイクシテ

イオリンピックの後です。当時、僕は今までにないほどのトレーニングを積み、身体を鍛え、メンタル面も強化し、オリンピックに臨みました。しかし結果は、ノーマルヒル49位、ラージヒル41位。まもなく30歳ということもあり、引退を考えてもいい状況ではありませんでした。でも、悔しかったからこそ、何がダメだったのかを真剣に考えました。それで、いわゆる「心技体」を欠いていたことに気づいたんです。鍛え上げた「心」と「体」に比べ、「技」が追いついていなかったのが原因だとの結



2014年8月、宮の森サマージャンプ大会で最長不倒賞のトロフィーに笑顔を見せる葛西選手 写真提供：土屋ホーム

論にいたりました。「ベテラン選手」と呼ばれる位置にいたこともあり、自分のジャンプスタイルには自信があつたし、それを頑なに守っていたのですが、結局は結果に結びつかないまま。それなら、何か新しいものを取り入れるしかないと思い、フィンランドから新しいコーチを招き、自分のジャンプスタイルをゼロから作り直すことにしたんです。その結果、飛距離は格段に伸びました。この経験は、柔軟な思考を持って、新しいものにもチャレンジしていくことが新たな希望につながるということを教えてくれました。

でいるうちに、すっかり健康になりました。学校でもやんちゃ坊主だったので、理由は定かではありませんが、先生に厳しく叱られたことを覚えています。でも不思議と、どの先生のことでも「好きな先生」として記憶に残っていますね。

スキージャンプとの出会いは小3の冬。友人が飛ぶのを見て「おもしろそうだな」と思っていたときに、

その友人に誘われたのがきっかけです。初めてジャンプ台のスタート地点に立った時はさすがに足がすくんだのですが、「飛んでみたい」という冒険心のほうが勝り、思い切った滑ってみました。飛行時間は数秒だったと思いますが、「どこまで飛んでいけるのだろうか？ もっと飛んでみたい！」と、スキージャンプ初体験にして、その面白さを知ってしまったわけです。でも、我が家には道具をそろえる経済的な余裕がなく、親は猛反対。それからしばらくは親には内緒で飛んでいました。町が主催する大会にも親には黙ってエントリーしたんです。そうしたら、いきなり2位になってしまつて。それを機にジャンプ少年団の関係者が親を説得に来るようになり、僕のジャンプ人生が始まりました。

本当の意味での グローバル人材とは

中3の時に全日本ジュニア指定選手に選ばれ、初めて海外遠征にも行かせてもらいました。世界のジャンプ選手たちと競い合えることを楽しみにしていたのですが、試合当日に雨が降り、重くなった雪のせいで、

運は皆に平等にあるもの

もちろん、理不尽な気象条件のせいで、自分の努力が結果として実らないときもあります。そんなときは、「今は忍耐の時なんだ」と気持ちを切り替えることも大切ですね。僕は、幸運も不運も平等にあるものだと思っっているんです。つまり、今、運が悪いのだとしたら、それはそのうち幸運がめぐってくる前触れだということなんです。僕のスキージャンプの歴史がまさにそれを証明していると思います。

金メダルの先にも夢はまだ続く

苦しいときも嬉しいときも、それ自分のことのように受け止め、僕を支え続けてきてくれた両親、姉と妹、そして今年、新たな家族になってくれた妻には心から感謝していま



profile
葛西紀明 (かさい・のりあき)
1972年、北海道生まれ。「土屋ホーム」スキー部選手兼監督。東海大四高校在学中の高校1年時に国際大会で初優勝。1992年、W杯で当時の日本人最年少優勝記録を19歳9か月で達成。2014年、W杯で史上最長優勝記録を41歳7か月で達成。同年のソチ五輪では、ラージヒルで銀メダル、団体で銅メダルを獲得。20年以上にわたり第一線で活躍する姿に、海外からは「レジェンド」と称賛の声が寄せられている。近著に『家族で獲った銀メダル』(光文社)がある。

す。ソチオリンピックで勝ち取ったメダルは、家族で取ったものだと言っても過言ではありません。次の目標は、2018年の韓国・平昌オリンピックで金メダルを取ること。そのとき僕は45歳。その次のオリンピックを目指すとなると49歳。それが叶うと、9回連続でオリンピックに出たことになります。そうすると、自分の性格的に「10回連続でオリンピックに出たい！」と言いつつ気がしますが(笑)。「夢を手放さない者だけが夢を実現できる」。この信念を曲げることなく、今後も精進していきます。

全くスピードが出ず惨敗。でも、その大会で入賞した選手たちは、雨天時にスキー板に塗るワックスを持っていたんです。自分の実力を思い知らされるのと同時に、日本のスキージャンプ自体が、まだまだ世界レベルではないことを痛感しましたね。中学卒業後は、より充実したトレーニングができる高校へと進学。高1の時に、国際大会で初めて優勝したのですが、海外の選手と競い合うたびに、世界の壁の厚さを感じました。オリンピック出場を意識し始めたのは、この頃からだと思います。

高校時代から、1年の半分を海外で過ごす生活をしていましたが、国によって異なる街並み、人々の雰囲気、その国ならではの食事は毎回楽しみます。最近、グローバル人材という言葉が耳にしますが、それは決して外国語に長けている人のことではないと思うんです。もちろん、自分の思いや意見を伝える努力をすることは大切ですが、僕の経験上、パワートークに話せなくても、その国の文化に関心を持ち、相手を受け入れようとする気持ちを持っていれば、どの国の人も歩み寄ってくれるし、親切にしてくれますよ。